

たましひはあしたゆふへにたまふれど

—『万葉集』卷十五、三七六七番歌をめぐって『万葉集』注釈の解釈一主義への疑問試解など—

山 本 秀 樹

柄にもなく『万葉集』の歌についてなど云々してみようとする。

心持ちとしては、普段、「江戸時代については何でもわかる」（中村幸彦）と言われるほどに残存資料の豊富な時代につきあっている感覚に即して書いてみれば、おのずから万葉専門家内で常識視されていることが相対化される、などといった僥倖が生じてくれれば好いのだが、と考へてのことである。

#### 序

話題としてとりあげようとするのは狭野弟上娘子の

多麻之比波 たましひは 安之多由布敬尔 あしたゆふへに 多麻布札杆 たまふれ

安我牟祢伊多之 あがむねい 古非能之氣吉尔 こひのけしけ（卷十五、三七六七）

この歌の第三句「多麻布札杆」の解釈史については、かつて

古く、魂が触れ合うと解したが、近年は鎮魂の思想を持ち込んで、魂振レドと解していた。最近更に、動詞給フの下二段活の已然形に助詞ドの接続するものと見るに至った」（武田祐吉『増訂万葉集全註釈』十一、角川書店、初版昭和三十一年

年、今昭和四十五年六版を参照）

という整理があるが、これを只今現在にまで延長してくれば、解釈史の整理としていまだに通用するようである。

右に「最近」のものとして紹介された見解は、日本古典文学大系（第一刷昭和三十七年、今昭和四十三年第八刷を参照）、日本古典文学全集（初版同五十年、今昭和六十年第十三版を参照）、新潮日本古典集成（同五十七年発行）、新編日本古典文学全集（平成八年）、新日本古典文学大系（同十四年）と受け継がれ、こうして今日の大古典叢書にはすべて、ほとんどこれ以外の説を見ないという牡観を呈した。鎮魂の思想と言われた「魂振レド」解を仮に「タマフリ解」と呼ぶとすると、かつて澤瀉久孝『万葉集注釈』（卷第十五、昭和四十年）に採用されるという光榮に浴したこともある、鹿持雅澄『万葉集古義』に淵源するタマフリ鎮魂解は、今日までにはほその姿を消したかに見える。

大局的には、江戸時代国学の跳躍的新展開の要素も確実に含まれていたと思われる折口信夫的なものが戦後実証主義研究の潮流

によつて急速に洗い流されてしまった、ということであろうと推測するが、上代文学研究で「タマフリ」——こう言っただけでも折口的と言つて好いほどのチームである（高橋英夫「遊びとたまふり」——そのうち特に「鎮魂の技術」節——「幻想の姿容」講談社、昭和五十八年。諏訪春雄「鎮魂」『折口信夫を読み直す』講談社現代新書二二三〇、平成六年。——といった話題が主題としてとりあげられることもほほ姿を消したかして、国文学研究資料館ホームページのデータベース「国文学論文目録データベース」で検索をかけてみても「タマフリ」をタイトルにふくむ論文は、昭和三十六年五月、いかにも民俗学の影響の色濃い土橋寛氏の「見る」ことのタマフリの意義（『万葉』三九）に次いで、昭和五十二年十月、民俗学成立極初期から大いなる注目を集めていた奥三河の花祭について史料調査を含む実地踏査を踏まえて中世までの無理のない歴史の遡源見通しを含む革新的考察結果を公表していた武井正弘<sup>しやうく</sup>氏の学者的鑑賞の片鱗を示す「タマフリ儀礼と神話」（『国文学解釈と鑑賞』四二—一二）以降絶えたようである。

だが、だからと言つて、タマフリ解がその姿を消さねばならない確かな理由が寂然と語られたかと言へば必ずしもそんなことなく、大古典叢書注釈上、ただ姿を消しただけなのである。

その理由は、わかる人間にはわかるのかもしれないが、傍目から見れば、理由もなくただ消されただけにしか見えない。それは、

素人はただ専門家の見解を鵝呑みにしていれば好いという傲慢ではなく、単に見開きに説明を収めなければならぬ枠の制約から来る説明スペースの不足にすぎないのであろうが、少なくとも説明責任（カレル・ヴァン・ウォルフレン）は果たされていない。だが、説明なしに行われる選択は、その選択に対する反証を不可能なものにする。反証可能性は学問（科学）の重要な資格である（ポパー）。説明なしの解釈一主義は、万葉学の学問性（科学性）を減少させるものと言わねばならない。

## 破

先の壮観が説明スペースの不足から来るものであろうという推測には、根拠らしきものがある。平成十年一月、伊藤博『万葉集釈注』（第八巻）には両説並記がなされたからである。

（まず「あなたのお心は、朝な夕なにこの身に頂いておりますが」とする「たまふ」下二段活用動詞「賜ふれど」訳を記した後で——山本注）もつとも、初句の「魂」の語源は「魂<sup>たま</sup>ひ」（魂<sup>たま</sup>の不全となった状態）にあるとして、また、第三句の「たまふる」は「魂振る」（魂の遊離するのを鎮める・生命力を増強する）の意であるとして、「揺らく魂は朝な夕なに鎮まり安らぐよう（奮い立つよう）にしています」というように解する説（神田秀夫「みそぎの周辺」、伊藤博・波瀬昌忠編、石井庄司博士喜寿記念論集『上代文学考究』塙書

房、昭和五十三年）もあり、これでも意はよく通じる。

ただ、（中略）『日本書紀』古訓（三例）、石山寺本『大唐西域記』長寛点（一例）、『倭名類聚抄』（一例）、『類聚名義抄』

（九例）に識性・識・神色、心、魂、魄・識・性・神・精・

精靈・靈・魔・魂魄をタマシヒと訓むことを紹介した上で、

—山本注）語源はともかくも、タマシヒを自分の不安な心情に限定することには抵抗を伴う。ここは、「タマシヒトハ、

思ヒオコスル心サシナリ」（『万葉代匠記』精撰本）という簡

潔な解で充分なのではあるまいか。（三〇九頁）

この両説並記が示しているのは、結果として下二段頂戴説が採  
択されるにしても、タマフリ説がどの程度いけないのか、なぜい  
けないのか、少なくともその説明がなされなければならない程度  
には、むげに無視されて好い説ではないということであろう。

それではタマフリ説の何がいけなかったのか、これまでに示さ  
れた手がかりによつて推量を試みる。

たまふ（下二段活用）尊者が卑者に物を与えることを表す  
四段のタマフに対して、同じことを卑者の側から物を受け取る  
ように表すもの。いたたく。飲食について言うことが多い。

（用例略。万葉集卷十四・三四三九、三八詔、四六詔。—山  
本注）ごく一部の注釈を除けば皆鎮魂の「魂振り」だと言き  
過ぎた解釈をなすところの「魂は朝夕に多麻布礼どあが胸痛  
し恋の繁きに」（卷十五・三七六三）も「あが主の御魂賜ひ

て春さらば奈良の都に喫上げたたまはね」（卷五・八八二）よ  
り思えば、当然このタマフ（下二）と見るべきものである。

万葉には単独用法しか見られないが、これを補助動詞的に用  
いたのが例の祝詞や宣命に類出する（後略。用例折年祭、一  
詔二三詔、中臣寿詞。—山本注）（『万葉集重要語句の詳解』

木下正俊氏担当項、『国文学解釈と鑑賞』三〇一 昭和三十  
六年春の臨時増刊、万葉集ハンドブック、二六一二、昭和三十

十六年二月。傍点山本。以下同様。）

ここに鎮魂タマフリ解は「行き過ぎた解釈」だとある。だが、  
それは単に万葉語法専門家の診断結果が下されただけで、ここに  
説明による同意と言うべきものは含まれていない。

「鎮魂招魂すること」「ミタマフリ」と言ふから、「タマフル」  
という動詞も存したと推定してよいだらう（土屋文明『万葉集  
私注』昭和五十二年）とするタマフリ解のどこが「行き過ぎ」な  
のであろう。「行き過ぎ」とは何を言わんとするものなのか。万  
葉專家にはこれだけで共通理解が生じるのか。素人たる者、置き  
去りにされるだけである。

あえて単純に考えると、下二段頂戴解には他の用例らしきもの  
があり、鎮魂タマフリ解には動詞「タマフル」の他例がないから  
「行き過ぎ」だと言うのであろうか。專家はもとよりそんな単純  
なものではあるまいが、仮にそういうこともあるとすれば、それ  
に、関しては、類歌を含むたかだか四千五百首強の韻文中に森羅万

象が蔵されるわけでもあるまいし、用例が見出される／たまたま見出されないということと解の真偽は別問題だろうと思われるのみである。

また、三七六三歌の「たまふれど」に因して、八八二番歌「より思えば、当然」と言われるが（これを参考するのはすでに「万葉集略解」にも見えて、大系以後、全集、新編全集、新大系と主な大古典叢書注釈にもひきつがれるものであるが）、八八二番歌の場合、下位にある筑前国司山上憶良が、大納言として帰京する大伴旅人に、自分も帰れるようその引き立てを懇願するのであって、御心をいただく（「御霊」を「賜ふ」という事態の理解に何らの困難もないのであるが、問題の三七六三歌の場合そうはいかない。前後の歌から見ても娘は旅中の男のことを恋うて歌う。その場合、下二段頂戴説の決定的難点が二句「安之多由布敷尔」に生じるであろう。

相離れた状態にある男から女が朝夕に魂をいただく・頂戴するとは一体何が起きることなのであるか。そして、万葉專家はそれについて説明ができるのであろうか。

前引「たまふ」項を執筆した木下正俊氏も加わる日本古典文学全集・同新編で見ると次のごとくである。引用は全集（昭和五十年初版、昭和六十年第十三版）。傍記したのが新編全集（平成八年）における変更点である。

お気持は 朝夕いつも 身に感じていますが わたしは胸が

痛しいのです 恋が絶えないので

語注は「魂」と「賜ふれど」について記され、それぞれ次のようである（×を傍記した箇所は新編全集において削除された文字を表す）。

魂—ここは相手<sup>の</sup>毛守<sup>が</sup>作者<sup>の</sup>娘<sup>を</sup>思<sup>う</sup>真<sup>心</sup>を<sup>さ</sup>す。

賜ふれど—賜フレは、頂<sup>く</sup>意<sup>の</sup>謙<sup>譲</sup>語<sup>下二段</sup>賜フの已然形。

日夜相手の 愛情の深さを感<sup>應</sup>してはいるが。

賜フの性格は異なるが「我が主のみ霊賜ひて」（八

八二）という例もあつた。中世歌が本質として愛情の深さを感ずるが、その單に「賜ふれど」に定まらぬ。

ここには真心（あるいは真情）を朝夕（四六時中）に感<sup>應</sup>感<sup>得</sup>すると言うが、では一体的には何が起こっているのであろうか。どうすれば相離れた恋人の真情を感じ取ることができるというのであるか。これは語を「賜ふれ」と認定して、それが何を意味するののかについての解説を放棄しているのではないか。

他の大古典叢書の解もここに参考してみると、大系（昭和三十七年第一刷、昭和四十三年第八刷）では「タマシヒ」と訓む漢字を「倭名類聚抄」「類聚名義抄」から紹介し（て、澤瀉氏「注釈」、前掲伊藤氏「釈注」の先蹤となり、「タマシヒ」の語の確実な用例は万葉集中にこの例しかないことを言い、「賜ふれど」に「鎮魂祭の祈禱をするが」「魂代（おそらくは衣）を振り動かして元氣をつけるが」「頂戴するけれど」など、諸説があるけれども巻五、八八二の「吾が主の御霊賜ひて」の例からして当時「相手の魂を

「頂く」という考え方が行われており、タマフの下二段活用の例が前掲巻十四、三四三九にあることが記されている。が、ここでもひきつづき「大意」が「あなたの魂は朝な夕なに頂いています、私の胸は痛みます。恋の思いがしきりなので。」であることが述べられるだけで、古代人が一体どのようにして恋人の魂を朝な夕な頂くことができたのかについて専家の見解を教示してもらおうとはできない。

新大系（平成十四年）も「第三句の解釈には諸説がある」ことをわざわざことわった上で『万葉集略解』の「男の魂をば吾にそへたまへれども意」と取る説「に従う」と言う。

やはり、では、何がどうなれば「男の魂」が女に「そふ」ことになるのかについて教えてくれるわけではないのだが、狭い脚注スペースにわざわざ「諸説がある」とだけ言うこの姿勢は、この解釈が容易に定められるものではない、ということを読者に伝えるものと言うべく、『略解』の解「に従う」という言いぶりもその説の採択が消極的に行われていることを言わんとするものではあるまいか。要するに、どのような擬制によって「男の魂」が女に「そふ」ことになるのかは、わからない、と言っているのではないかと思われる（なお、新大系の注はこれにとどまるわけではなく、参考歌巻五の八八二について漢語の類似表現を指摘したることについての参照指示を記す）。

新大系『万葉集』は、同シリーズ刊行開始直前に配布されたバ

ンフレットで見ると佐竹昭広・山田英雄の二氏による国文歴史の緊密な協働注釈がうたわれており、佐竹氏は同シリーズ刊行開始一年後の座談会（「研究の対象としての文学」『文学』季刊第一巻・第一号一九九〇年冬、平成二年一月。同シリーズ『万葉集』刊行開始九年前）において

研究が進むということは、事がわかってくることだけではないでしょう。わからないことが増えてくることも進歩でしょう。（大系と新大系との間で『万葉集』研究がそんなに進んでいるものかとの懐疑的発言もあるが、山本注）そういう形では随分進んできたとは思いますが。（一一頁）

注釈書というものは、商品としては読めたようにしなければならぬだろうけれども、本当はますますわからなくなってきたいますよ、ということも伝えたい。（同）

と発言していたことが思い出される。同座談会の益田勝実氏発言によれば、佐竹氏は全集注釈共同担当時にも

この項も未詳、この項も未詳と書く、そうすると本屋さんのほうは、未詳はつかりの頭注や脚注では売りものにならないから（笑い）何かいままでの人の業績ではほぼ認められるところを書いてくれという、ところがそれを書くのは嫌だということを書いていたらしい。

一方、集成（昭和五十七年）は、大古典叢書注釈の中では唯一

懇切にこの擬制について踏み込んだ説明を付けようとしている。

集成は魂について語注で

遊離魂。思いが強ければ身を出て通うとされた。

とし、歌の意味も

あなたの深いお心は、朝な夕なにこの身に通つてきて、いただいておりますが、それでも私の胸は痛みます。逢いたい苦しさがしきりに身を責めて。

として、この解釈挿添によつて一瞬事態ははつきりしたように思われたのであるが、しかし今一度気を落ち着かせてよく考えてみると、夢に現れるわけでもなく朝な夕なに遊離魂が通つてきているとどのようにして知覚できるというのであろうか。

右の解釈によつてはつきりしたように思われた事態も、やはり最初と何ら変わることはない混沌のままにあることをわれわれは自覚せざるを得ないのである。

さきに本歌の「たまふれ」解がまだ確定されていないのではないかと感得される根拠らしきものとして示した、両解を並記する『釈注』（平成十年）は、右の集成にも参加されていた伊藤博氏の手になるものである。『釈注』の釈文ならびに語注はおのずから右集成の詳説の体をなす。

魂 遊離魂をいうと思われる。(三三三三頁語注)

しかし、『釈注』は「賜ふれば」について直訳的で、集成のごとくに「通つてくる」とまでは言わないので、その点については

一歩身を退いたものと言える。

あなたのお心は、朝な夕なにこの身に頂いておりますが、それでも私の胸は痛みます。逢いたい思いの激しさに。

だが、釈文中には補説が含まれる。

この歌は、古代に「魂合ひ」（遊離魂が一つになる）の信仰があつたことを教える。相手を思う心が強ければ、魂は身を出て通い合い交情が成立するとする考えである。この類は、すでに12三〇〇〇、13三二七六、14三三九三にあつた。今、『釈注』によつて三歌を見よう。

三〇〇〇 魂合へば 相寝るものを 小山田の 鹿猪田守  
るごと 母し守らすも

一には「母が守らしし」といふ

魂合者 相宿物乎 小山田之 鹿猪田禁  
如 母之守為袞

一云 母之守之師

三三七六 百足らず 山田の道を 波雲の 愛し妻と 語

らはず 別れし来れば 早川の 行きも知らず

衣手の 帰りも知らず 馬じもの 立ちてつ

まづき 為むすべの たづきを知らに ものの

ふの 八十の心を 天地に 思ひ足らはし

魂合はば 君来ますやと 我が嘆く 八尺の嘆

き 玉棹の 道来る人の 立ち留まり 何かと

問はば 答へ遣る たづきを知らに さ丹つら  
ふ 君が名言はば 色に出でて 人知りぬべみ  
あしひきの 山より出づる 月待つと 人に  
は言ひて 君待つ我を

百不足 山田道平 波雲乃 愛妻跡 不  
語 別之来著 速川之 往文不知

衣袂笑 反裳不知 馬自物 立而爪衝

為須部乃 田付乎白粉 物部乃

八十乃心叫 天地二 念足橋

玉相者 君来益八跡 吾嗟 八尺之嗟

者 玉粹乃 道来人乃 立留 何常問

者 答遣 田付乎不知 散釣相

君名曰者 色出 人可知

足日本能 山従出 月待跡 人者

云而 君待吾乎

三三三三三 筑波嶺の をてもこのものに 守部据え 母い

守れども 魂ぞ合ひにける

筑波祢乃 乎豆毛許能母尔 毛利徹須惠 波播

巳毛礼粹母 多麻曾阿比尔家留

なお、右、三二七六番歌は「釈注」にも、もと改行まではしないが、伊藤氏の釈文にも、前半の終わり六句「為むすべのたづきを知らに もののふの八十の心を 天地に思ひ足らはし」が、改行

前と改行後の双方で意味を持ち、そのことよって前半と後半はつながれはするものの、前半が旅に出た夫が残して来た妻にうしろ髪を引かれて進みもやらぬ悲しみを述べ、後半が夫の訪れを待ちかねる女の苦しみを述べるといふ一部の分離はおおいがたく、結局前半と後半は直接の関連を持たない別々の歌がつなぎ合わされたものと見られるよりほかないので、今仮に改行して示すことにした。

右、三歌は結局「魂」が「合ふ」ということの用例ではあるが、それらの用例は全て、びたりと気持ちいが合うとのみでもその解釈に困難はなく、これらの歌の内容が「魂合ひ」なる事象の擬制の仕組を説明してくれるものではなく、それどころか、名詞と動詞とによつて表現される一状態にすぎないものが、これらの歌の観察者伊藤博氏によつて「魂合ひ」なる一概念に昇格され、その意味内容も伊藤氏によつて仮定されているという事の次第は、比較的素人の眼にははつきり見えることであらう。

また、「魂」が「合ふ」という単語をすら使用することのない、問題の三七六七番歌にこの「魂合ひ」なる概念を持ち込んで好いという判断も、持ち込むというその操作も（これらは伊藤氏以前——澤瀉氏「注釈」以前——からある考えを微調整し採用したことであるにもせよ）観察者によつてなされたことである。

さきに第三句の解の不定を示唆しているであろうとした新大系脚注にはその前に初句について

初句原文の「多麻之比」は、この語を仮名書きする古い例として唯一のもの。

とわざわざ記していた（なお、このこと澤瀉氏「注釈」にも既に記す）。

これは強調念押しの語気に思える。

思うに、他に見えぬタマシヒの語をここにわざわざ使用する意味があつてしかるべきであり、それが考えられなければならぬところでありながら、他にこの語の確たる使用例がないためにそれが「わからない」という意味であろう。

この歌がかかえる孤例はこのタマシヒだけではなかった。さきに見たようにタマフレもまた、あるいは孤例である可能性を持っていたのであつた。

この歌には、「タマ合ひ」ではない「タマシヒ」の「タマフレ」と表現される固有の意味があり得る。そして神ならぬ身の知るよしもなし、人の子にとつて、これを「魂合ひ」と見るのが正しいのか、それと関係がないと見るのが正しいのか、判断の根拠はどこにもないと見るのが正解であろう。

『万葉集』テキスト解釈の実相が率直に反映され示されるために、注釈の解釈は本当は容易に択一されてはいけなないものと思われる。前掲の季刊『文学』の座談会「研究の対象としての文学」において益田勝英氏は言う。

本当は佐竹流に、未詳だらけの注釈ができたほうが、二十世

紀後半の仕事としては役に立つかもしれないと思うのね。できれば、なぜ未詳になったかというプロセスまで書いてあげばいいのね。(一〇・一一頁)

急

本人たちはそれぞれに真摯ではあつただろうが、それにしても万葉時代から一千年もの時を隔て、社会制度すら大変転を遂げた末の江戸時代の庶民が、注釈を記し、自分たちなりのアイデアを示したのである。また、万葉からそれ以上の時代を隔てた折口信夫とてその通りであろう。われわれもわれわれなりに可能な限りのアイデアを示してみても、それが是非々自由な議論の俎上にのり、脈のあるものなら並記注釈されて行けば好いことであろう。

タマシヒが孤例であることを重視し、そのことに応じて「タマフレ」もまた孤例であつたとの想定の下、私案を試記する。したがつて、これは他の解の存在を否定しようとするような意図のものではない。

さきに伊藤氏「釈注」が紹介していた「魂」の語源は「魂たま言ひ」(魂の不全となった状態)にあるとする神田氏「みそぎの周辺」もこのタマシヒの仮名書き例がこれ一つであるとした澤瀉氏「注釈」の記述を重視してタマシヒの意味について考えたものである。

神田氏はシヒの部分に関して、「目しひ」「耳しひ」の「しひ」

と同じものという「仮説」を立てた。これらの「しひ」は「しふ」(不具・廢疾になる。感覺を失う。【時代別国語大辞典】上代篇)という四段動詞の名詞形である。

このタマシヒ、神田解の結論を「魂の不全となつた状態」と表現し、また「タマシヒを自分の不安な心情に限定する」と表現したのは実は伊藤氏である。と言うのも実は神田原論文ではかなり大きく表現ならびにニュアンスが異なっている。(今神田秀夫論稿集一「東から見た河と江と」(明治書院、昭和五十八年)所収によつて引用する。)

「たま」が「しひ」た状態になることは、置時計の秒針が示してゆく、その秒刻の音を、いつまでも聴いてゐようとすると、ふっと、きこえなくなる時が必ず来ることで、いつでも実験できる。われわれの注意の集中力には限界がある、必ず盲点を生ずる(九〇頁)

神田氏の考えによれば、「たましひ」は「年中、充実などしてゐるもので」(傍点原ノママ)はなく、「平素は、その存在すら忘れてゐるものであり、「たましひ」は平素はその感覺を失つた、しひた状態にある。」「何かあつた時、これではならぬとなつてはじめてその存在を自覚するものが「たましひ」である。

三七六七の「魂しひはあしたゆふへに魂ふれど……」は「魂しひ」が「魂」の無感覺になる状態を表はしてをり、平安朝以後今日まで觀念されて来たやうに「魂たましひ」といふ

等式はまだ成り立つてゐなかつたとみられる。敗戦直後「虚脱」状態とか「虚脱」感とかいふことが流行語になつたことがあつたが、あれも一種の「魂」の「しひ」であらう。「しひ」だからといつて、病氣とは考へられてゐなかつたと思ふ。

このように、神田氏は明らかにタマシヒについて二つのことを述べており、神田氏の説明は決してわかりやすいものとは言えない。

結局神田氏は最後には娘子が無感覺の虚脱状態(魂の「魄」状態)に陥つてゐるのを「たま振り」行為によつて魂を充実させる(陽氣を与えて充実した「魂」状態にする)と説明する(神田氏は、古代中国の、魂・魄が陽陰二氣の人体に宿るものとする説明の上に立つて「たま振り」と「たましひ」について考へている)のだが、その説明とそれ以前に行われた、我々の注意の盲点、平素われわれが魂の存在を感じていない状態を「たましひ」と言うという説明がどう関わつてゐるのか——すなわち我々はタマシヒ状態を虚脱状態と見るべきなのか、平素の状態と見るべきなのか、神田氏の説明によつては我々は落ち着き先のない宙吊り状態にされてしまふ、と言わざるを得ない。

要するに、さきの伊藤氏の言い換えには、このわかりにくい説明を俗耳に入りやすくしすぎた嫌があるのだが、それはともかくとして、神田氏の試解は、魂シヒ・目シヒ・耳シヒのシヒが、それぞれの機能が働かない状態を示しているという理解を示唆す

る。

タマの機能が働いていない状態、タマの不活性状態とはタマの平素の状態、タマが凝り固まつて「シヒね」とはこぶのことである）、遊離しない状態にあるということではないのか。

玉は平素この胸の中にあつて振れている。それは胸に手を当ててみればいつでもわかることである。

死んでしまった人間の胸に手を当てても、もはや玉は振れていない。玉は魂は胸を離れて出て行つてしまつたからだ。

「魂シヒは朝夕へに玉振れと吾が胸痛し 恋ひの繁きに」。

現代のわれわれの言葉で言つと、娘子の心臓の鼓動は遠く離れた男のことを恋つて痛いほどに激しく拍つたのであつた。

(注) 本稿はタマフリを平安時代に定着した鎮魂祭との関連で見ない。

「日本書紀」天武天皇十四年の「招魂」に「ミタマフリ」と振つた例があると言われるにもせよ、江戸版本に付されたそのフリガナがどの時代にまで遡れるものか未詳であるし、また、その「招魂」の呪法は万葉時代、常時行われている風でもないし、さらに、おそらくはもうもろもろ技術もそろいがちであるう天皇周辺で行われた「招魂」の呪法と娘子の「タマフリ」が必ず同じものであるとしなければならぬ理由があるわけでもないからである。なお、鎮魂祭についての近時もつとも重要な、看過すべからざる、丹念な史料確認を踏まえた実証的かつ分析的宗教史学研究は渡辺勝義「鎮魂祭の研究」(名著出版、平成六年)であろうが、新嘗祭前日の夕刻から執り行われる鎮魂祭で鎮め

られるのは外来悪霊魂であるとする。同様の想定は、前期の折口信夫にも見えて、現代から中世へと神楽を廻行した岩田勝氏が折口説をもつて折口説を批判するとの手法を採つた「天石窟の前における鎮魂の祭儀」(同「神楽新考」名著出版、平成四年) 初出岩田勝編「神楽」歴史民俗学論集一、名著出版、平成二年) でもすでにそのように考えられていたし、諏訪春雄氏も同様の脈絡から前掲「折口信夫を読み直す」(平成六年)において「善魂と悪魂をどのように区別して、善魂だけを身につけることができるのか」(三九頁)と言つていた。

〈主要参照研究文献〉(本文に記したものをのぞく)

山田慶兒「診断諸法と「虚」の病理学」同「中国医学の起源」岩波書店 平成十一年

宮家準「修験道の災因論」同「修験道思想の研究(増補決定版)」(第九章「修験道の救済観」第二節)春秋社 平成十一年

副島知一記述「鎮魂と齋戒」石清水八幡宮社務所 昭和二十五年

副島広之「あとがき」副島知一「改訂鎮魂と齋戒」京文社 昭和四十年

一年

土橋寛「採物のタマフリ的意義」同「古代歌謡と儀礼の研究」岩波書店 昭和四十年

店 昭和四十年

「見る」ことのタマフリ的意義」同「萬葉集の文学と歴史」土橋寛論文集 上 塙書房 昭和六十三年

「霊魂——その形と言葉——」同「日本古代の呪術と説話」土橋寛論文集 下 平成元年

関一敏「アニミスム」関一敏・大塚和夫編「宗教人類学入門」弘文堂

平成十六年

小田亮「呪う」同右

佐々木宏幹「宗教人類学の流れと現在」佐々木宏幹・村武耕一編「宗教人類学」《宗教文化を解説する》新曜社 平成六年

関一敏「宗教人類学の視覚と方法」同右

井形碧「宗教文化の諸形態」多元的リアリティの立体視」同右

上杉富之「呪術と社会」同右

マルセル・モース「呪術の一般理論の素描」(一九〇二・一九〇三)

同「社会学と人類学」I 弘文堂 昭和四十八年

クロード・レヴィ・ストロース「マルセル・モース論文集への序文」(一九五〇) 同右

大形徹「儀礼」凶礼と魂・魄・鬼・神・吾妻重二・二階堂善弘編

関西大学アジア文化交流研究叢刊三「東アジアの儀礼と宗教」雄

松堂出版 平成二十年

——「儀禮」土喪禮の「復」をめぐる——「復」は鮮生を願う儀式

なのか「アジア文化交流研究」二 関西大学アジア文化交流研

究センター 平成十九年三月

小南一郎「漢代の喪葬儀礼」その字宙論的構造——同右

田中久夫「殯宮考」元興寺文化財研究所編「東アジアにおける民俗と

宗教」吉川弘文館 昭和五十六年

和田萃「日本古代の儀礼と祭祀・信仰」上 堀書房 平成七年

武井正弘「花祭の世界」日本祭祀研究集成(三)兩祐雄・坪井洋文編

四 祭りの諸形態II中部・近畿篇 名著出版 昭和五十二年

諏訪春雄「三信遠花祭りの基本構造」同「日中比較芸能史」吉川弘文

館 平成六年

宮家準「解説 修験道から宗教民俗へ」五来重著作集五「修験道の修

行と宗教民俗」法蔵館 平成二十年

五来重「大和三輪山の山岳信仰」五来重著作集六「修験道靈山の歴史

と信仰」法蔵館 平成二十年

——「金の御嶽」同右

山路興造「研究の手引」ほか 芸能史研究会編日本の古典芸能一「神

楽 古代の歌舞とまつり」平凡社 昭和四十四年

藤野岩友「鎮魂」の語義とその出典と」『国学院雑誌』第六十九巻第

十一号 昭和四十三年十一月

「松前健教授 略歴 著書・論文目録」上田正昭編「神々の祭祀と伝

承」松前健教授古稀記念論文集 同朋舎出版 平成五年

(付記)これは時間のポトラッチである。独法化後突如給料一割引大

学に奪奪する身の上として、今や恩義を感じる教授の退官に際

しても私の場合ほかに何もできないことがない。せめて院生以来

取り組むことのない不慣れな、先生が専門とする対象に取り組

んで、定年まで残すところ二十年を切った自分にとっては惜し

い貴重な研究時間を潰すことで先生の恩義に酬いんとする。と

にかく不運の身の悲しさ、下調べに費やした前期授業期間は多

分につらく苦しかったが、いざ書き始めてしまうと、ふだん江

戸時代文学の際には味わうことのできない、想像をめぐらして

いることの方が多い作業に、実に愉快な遊文の時間にひたらせ

ていただいた。先生には感謝の意をまた重ねて奉る。

(やまもと ひでき 岡山大学大学院社会科学文化科学研究科教授)